

詠め珍らしき日本第一の富士見る事と、大方ならぬ風景、吉原の茶屋に休らひ、己れを忘れて目成り居るに、其處の主人の語るは、是れより行く道僅かに有りて、左の方に田の畝あり。爰を傳ひて向ふに出づれば、富士郡の内の田地や宿あり。此里より見る景こそ山の形も一しほに秀で、猶堪へ難き詠めて有りと云ふに、其れより心づいて、尋ね求めて爰に到れば、誠に聞きしに違はず、一村の構への農家まりける。岩に腰掛けて杓か覗けば、地響にして寥亮く、峰は白雲を被いて稱ひ清く、田子の浦浪、金毬「毛カ」を纏はして、催する逸興、樵夫哀歌を歌つて、樹猿を叫ばし「む脱カ」る。漁夫釣竿を伏せて水鳥を伴ふ。此様實に腸を断つと思ひ、昔日赤人の詠せしも哀れになつかしくて、分けなる涙に袖を濡らして、彼の邊の寺に立寄り見れば、一人の法師法華を修して在りける。田舎の人に事變りて、物優しげに此方へ入れよなどと様もてなじ、浮世の咄、佛世の昔を語るにも、聞く事毎にも殊勝さ増されば、如何さま徳ある僧にて有るよと難有うて、此里の見し様など思ひ寄るまま、法師に向ひ、片田舎は人の心も好しく、または貧家野夫も多く有るものなるに、此所は民情も邪ならず、分けて飢ゑたる色さへ見えず、家も賑はひ豊けく見え侍るは、足下此里に住はせ給ひて御法の尊きをも説き給ふ故に、人心和らぎ、天の恵みも有るにてあらんと語るに、住僧答へて、我に徳無ければ争で然る事侍らん。然れども此所に一人の奇異の男有りて、如何なる事の業を學びて、實には牛飼ふ童、新かづく女までも、脇の里よりも賢き様も見え侍ると云ふに、さて其人は如何なる事を常に爲すかと問へば、僧答へて、さしも人に異なる事も無けれど、其身世世に貧しからずして、

人をも多く使ひ侍るに、未だ家人の怨むる事を聞かず、家内に争ひを爲すこと無く、上下和して隔つる無し。此男世の常の物云はず、朝疾く起きて從者に先立つて畑を打ち、田を返して、身を安く置かず。所の者諫めて、手づから自ら斯く勞し給はぬとも、多くの人を持ち給へば、事成り行きなん、唯だ體を休めて居給へと云ふに、男の云ふ、我れ自然の幸を以て、斯く富貴の身と成るとて、人に勞を譲り、我れ遊興して世を渡らんや。天の實を思へば遊ぶ時は心疲れ、身を使へば心裕けし。此故に外を捨て内を樂む。また我に従ふ者無ければとて、彼れを勞さしめて、己れを誇りて有らんやとて、物を爲すに難き所を爲し、食を爲すにも人に運るる。貧者飢ゆれば助け施し、貢足らねば補ふ。常に我が爲めの奢を爲さず、儉約にして身を慎む。此故に自然と村賑ひ、民心も素直なりと語るに、聞くより至人かなと思ひて、彼の家を尋ね行けば、聞きしにも似ず、僅かなる體に野面石などかき揚げて、其上に篠竹の組垣、さしもあさましき内に、四十餘の男の、親の木像を拜し居る。婦は茶を汲みて庭の奴に與へ、善を成す様なりし。我れ彼の人に云ふ、今聞くに足下の仁性、近隣の境に溢れり。譽れ有る者は嘖り有り、譽れに居れば身を勞す。功成つて身退くとは此謂なり、此心を知るなり。男答へて云ふ、我もと功無し、善を知らず、譽れを知らず、名も知らず、我が爲す所は常たり、爲す事に譽れを求めず、爲す「に脱カ」名を求めず、爲すに利を求めず。此故に機を勞せず、心を愁へず、神を傷めず、唯だ平日自然に任す「と脱カ」云ふに、面眩くて立ち歸りし。

四 目籠の翁

次第に武藏路に近づくに、昨日菅根の難所を越えつつ、長途の疲れに取り添へて、今宵は此町に宿り、明日は一日逗留して足を休めて居けるに、一人の老人、小鯛と云ふ魚を荷ひ賣り歩きしが、餘所の魚を皆人にくれて歸りし。如何さま替りたる者と思ふに心ゆかしく、彼の宿を慕ひ見置いて、明日の彼者の家の邊に宿して、能く其境界を窺はんと思へば、先にも行かず、是れより跡に見し、唐作りの寺に參詣でて、和尙に謁し退いて問ふ、如何なるか西來意。答へて、己れ變性を悟りて見よとばかり。其後は尋ねべき力も無くして、御法の深き道など聞きつつ肝を傾け、實を發し、身の愚かなること憂ふる中、早陽影溪に下り、龍の流れ春けば、其れより門下去りつつ、彼の見置きし家近う宿して、心を付けて待ち待るに、くだんの卑夫、目籠掛けて歸るが、昨日の如くまた餘れる所を他に配りぬ。我れ宿の主人を呼びて、何故にあの男、商ふ魚を人に與へ配るやと問ふ。主人の答へて語る。此者を常備儲くる分限を極め、朝より夕に及べども、其限りを賣らざれば歸らず、たとへ一時にも定まる分を商へば重ねて賣ると云ふこと無し。其日は一日夫婦共に、遊びて暮しぬ。さて翌朝「に脱カ」なると、是れより遙かの濱邊に出でて、魚買ふて来る。婦は一日の人仕事取りて是れを業とし、其價を取りて酒に替へて夫を待つ。夫歸れば、二人頭傾けて飲みぬ。朝夕の饗とても卑しき麥の飯などに暮す。隣家親しけれども一生米錢を借らず。人また用を云へば衣も替へても與



ふ。をかしき男と語るに、奥深く思ひて、其卑夫の家にきて見れば、古き衾、紙の衣より外は無し。喫茶に勞を忘れたる様にして、油火幽かに挑けて居けり。此樂しげなる體にゆかしさ彌増し、我も茶などを乞ひ請け、暫し語りて其志を問ふに、男云ふ、別に何の志も有らねど、長りて以來、物と争ふ事を知らず、人を恨むる事を知らず、人を感らかす事を知らず、財を求むる事を知らず、富貴に近づく事を知らず、命の惜しき事を知らず、死の來る事を知らず、貧を恥づる事を知らず、一世の利をも知らず。然れども分を知つて分を樂むものなり。我れ愚かにして人たる者の樂みをする事を知らずと、はかなけれども、自然の道を思へば、我をも恨みず、天をも恨みず、唯だ春夏秋冬に相當る魚鳥を日毎に儲つて暮す。未だ一日も飢ゑること無し。是れ天道の與へと嬉しく、自然と賣る所の餘慶を種として、今日までは苦むこと無しと語るに、また問ふ、自然の餘慶を以て種と成さば賣る餘所の物を何故人に施すやと云へば、男笑つて、今日の身、天是れを生ず、然れば生くる所の身を以て食を求む。明日また天より身を生かさば其身を以て食を求めん。死なば求めじ。此故に今日の糧を以て明日の糧と爲す事知らず。今日の糧足りぬれば、足らざる人の爲めに施す。足らざる人をば飢ゑさせて、足りぬる我れに貯へんやと云ふ。一生徳を愼み、深く隠れて人に見知らねば、空しくやがて朽ち果てぬらんとばかり。

⑤ 畢栗「筆策」道心

志す所は此處の事にてこそと、品川に入りつつ見れば、行き交ふ車馬駁を争ひ、九家者流の人立ち騒ぐ、勇勇げなる様云ふばかり無し。其日は一日知る人の宿尋ねつつ、漸く求め出だして、舊里舊友の物語に、夜明し日暮して、其れより此野の葉末を分けて、彼方此方とするに、永代島の邊りを通りしに、筆策の聲幽かに聞えければ、立ち止まりて見るに、未だ三十を過ぎぬ程の法師の悠悠として、調子の妙を樂むに有りし。庵中を見れば、御室焼の茶釜の、小小やかなる鍋一つの外は、朝夕の饗する物さへ見えず、棚には莊老の二書、机に口寄せの香爐、向ふに朱衣の達磨、斯くては如何に住み詫び侍るやと、あやしき道に思はれ、猶彼れが調子を聞き居けるに、其曲まことに感愛ありて、愁喜共に忘れて、茫然として立ちしに、早夕陽山陰に移り、鳥啼を尋ねければ、歸らん道の遠きを思はれ、立ち去らんとしけるに、彼の法師我が袂を控へて、行かん道、野邊の露も深かりなん、殊に夜行の恐れも多し。さして用ある身にもあらずば今宵は草庵に明して、明日歸り給へかすと云ふに、嬉しくて其夜は其處に留り、終夜を語り明すに、法師の云ふは、世の中の何に付けても、皆夢現の渚、今語るも中中事がましけれど、我も初めは富貴の家に生れて、貧と云ふ事を知らず、日夜遊宴に富みて、慰む業を事し、同じ心したる友と傾肆に入りて明し、小歌舞曲の小童と戯れて暮しぬ。或る時は年比相馴れし姪婦と枕を並べし夜、世の中の萬づ心に任せぬ事を語り出だして、我も共に打添へ敷き沈みし比、早亂れも鶏の啼して、曙の間洩る影さへ白く、是れに驚きつつ、朝露の茂みが末を分けて歸るに、夕傾婦の語りし事ども、是れ世上の習ひなるよと觀ずれば、願ひ滿ち思ひ

の儘なる上に樂みと成りても、未だ樂みにはあらず。斯く思ふより、世の外なる樂み有らんと思惟し、風與思ひ付きし事の侍れば、其日に家財悉く分けて、家の一類、親しく語る友に心當して、書置細細と調べ、自ら愛根の鬢を切り捨て、此簪篋を抱いて何國とも知らず出でつつ、二とせ餘り行脚せしに、見残す所も無く、今此處に來りて、此樂みを成しぬ。計るべき知の無ければ、人の善惡を知らず、願ひ無ければ愁無し。一門親しきより僅かの助けを請けず、諂はず、恐れず、驚かず、朝夕の烟、糧の有るに任すると語りし。

近代艶隠者

卷五

目録

- ① 千年の花島 菊の翁
- ② 一夜物語り 網漣きの浦人
- ③ 時取の切火繩 渡し船の老人
- ④ 心中の草枕 綱の兄弟
- ⑤ 名は埋れぬ石塔 備前の水汲

① 菊の翁

武藏の片はひに暫しは留り居つつ、珍らしき西國行脚の物語して、人慰めんと斯く書き捨つるもはかなや。昔筑紫に結びし草庵も心に染まねば、柴門の斜日に爰を住み捨て、都の方を志し行くに、領布振る山を詠めても、忘姫の哀に心を移し、玉嶋の水の鏡に跡立ち消えん事を名残、絶えず流るる思川にあだなる世上を笑つて過ぐれば、早筑前の鐘が御崎漕ぎ越え、生の松原に掛かるに、其間一里に過ぎ、雲玄妙に、磯砂明なり。兩岸苔蘚緑として、胡摩の清風眼を打ち、遠帆の魚舟沙鷗の飛ぶかと疑ふに、青島の海原近く、那古の賤が屋も寥亮なる頃、鹿の音送る風に任せて、箱崎の浦を見掛け、袖の湊に草鞋を留むれば、其日は彼の邊の野家「傍訓やけいトアリ」に明して、明朝日開けて起きるに、隣の裏に女の聲して、今年は鷲毛も生ひ好し、御愛醉楊妃も育ちも好し、天野原玉の出来も大形なりし。底根廻せよ、此芽を掻けと云ふ。如何なる事やらんと、垣越に差覗けば、五十ばかりの姫の一人の娘つれて、園なる菊を愛するにて有りし。其様よく見るに、其種種の名分したる上に一つ一つ覆ひの具へして、少女は團扇を持って葉末なる菊虫を拂ひて居けり。良久しく有りて、鬢白糸を成し形三輪組なる翁の、己が仕業の農作をして歸ると見えしが、片脇に鋤下ろし、今日の便も成しけるよとて、彼の菊畠に出づれば、驅手を引き、少女は腰を押して苗を見せ廻るに、翁樂しげに枝の露を拂ひ、根の虫をせせりて、暫し片脇なる床机に在りて、夫婦ささやかに物語し

て在るに、娘は内に入りてをかしげなる鈴「錫」の徳利に、盃添へて持ち出でしを、翁引き請けて呑むより、姫の前に差置きて、いと面白げなる聲して、死して黄金を北斗に積むよりは、生前の一樽にはと笑つて眠りし。是れを見るに、其境界羨ましく、此方より名を問へども云はず。其れより宿の主人に尋ねれども、菊好く事さへ知らぬとぞ答へける。餘の不思議に思ひて、垣を潜りつつ行きて翁「に脱カ」謁し、如何なる徳士の世に枯れて、斯く市中の至隠と成り給ふ「と脱カ」問ふに、翁斷みて忍笑みて、至隠は賢にこそ有れ、我れ何の賢か有らんとばかりに、さして答も爲ねば、問ふべき言葉も無くて、又の朝、垣より見れば、翁と共に三人裏に出でしが、掻き残す苜、夏蔞の菜など引いて朝の饗する様なりし。暫く有りて、翁は拐に肩借して出でけり。今日こそ歸らんを待つて、是非に其意をも聞きなんと思ふに、見しに違はず、菊愛して遊びし。我が袖垣を越え、翁に向ひ、さるにてもゆかしや、御有様を見奉るに、歡樂自然にして、中中見るも楽しくこそ侍れ、御心の中をも語り給ひ、我が學びにも爲させ給へと云へば、翁差仰向いて、我れ若かりし程は、友達の悲しき事を見侍りし。彼者三が津を騙け廻り家業おこ「た脱カ」らず、元見しよりは次第に富貴の身と成り、後は家をも求めて有りし。其れより財寶日日に盛り、年年に増さりて利を増すこと大方ならず、終に津津浦浦を廻れど、遊女歌舞の里にも入らず、毒藥を恐るる如くにして遠ざかり、年四十に至らずば妻も持たじとて、獨身の修めて居けるが、日夜に唯だ利欲の事のみ思惟し、朝夕の食にも鹿なる喰ひ、身を苦め心を勞して、貪婪欲しい儘にせしが、心疲れ氣は衰へて癆病を憂ひ、終には若死してあ

りしが、其比彼れが語りし友皆打寄りて、はかなき仕業や一生斯く勞しても、財を護るべき子孫も無し、皆他人の物とは成して、樂みも知らず死にしよ、人の非を見て己れを知ること、學びの一つにて有れとて、とりどりの思ひ入なりしが、其中に獨り異人ありて、深く山中に籠り閑居の身と成りて有りける。是れは人家を香かにへだ「てヲ脱ス」し故に、一年狼獸の荒れし時に、彼れが爲め喰らはれて死し、彼れは心を養ふ爲めに命を失ひ、前の男は外を飾らんとて命を失ふ。是れよりして我が境界を觀じて今此處にと語りぬ。

② 網漉きの翁

猶一日も歩行を留めざれば、小倉の渡しを越えて、下の驛を立ち越し行くに、日を経て長門の萩に着きしに、やうやう暮に及び、一夜の宿を尋ぬる比、五十餘りの男、我を泊め參らせんと云ふて、宅に伴ひ歸る。内に入りて見れば、さしも卑しからず作りたる亭に、子昂が馬繪、目馴れぬ花入の粧、脇には禪板禪單も見えたり。庭には鈍豆のをかしげなる、垣に纏ひ、茗荷の若生え、露の盛んなる林など有りて静けきに、勝手には四十餘りの女の、故ある様しながら、漁夫の營む網漉いて在りしが、彼男奥に入りつつ、今宵は客儲けしぞ、響應せよなど云へば、女房自ら、飯炊ぎ、懸ろに營み、飢ゑを助けさせ、湯など取りて、疲れを休めさせ、機織勞りければ、いと心有る人かなやと感じて、其れよりは互に打解けて、其れ彼れ物語し、深更に成れば四隣靜かに人鎖まつて、邊寂びかへる比、我れ主人に問ふは、昔卑しからぬ世渡らひと見

奉りしに、何とて奴婢も無く、斯く自身の穢する身とは成り給ふかと問ふに、主人女房答へて、今のたまひし如く童「妾」も過ぎつる程は、人の頭とも呼ばれ、財産にも乏しからず暮せしに、此十年餘り前に、爰なる人の物に、器量人に勝れ、形も優しく生れつきたる美童ありしを、隣國の太守御目に入りて、是非に召し使はんなど仰せて、身に餘る程の祿賜はり、日に終日御側に候じ、夜は寢所に寵せられて、中中日月の光さへ見ざる程なれば、彼れが心に思ひもし、云ひもしする事毎に叶はざるは無し。また彼れの弟も長るに及び、兄の美質にも勝り、才能も世の常ならず、さも裕けく育ちし程に、是れも隣國の守に仕へて、慈愛外に勝れければ、彼れが威勢に一門誇り、彼等夫婦も猶富貴を増しつつ、偏に飛龍の天に在るか如し。然るに五年跡の春、彼の兄なる者男と成つて後には、國の探する程に成りし。誠に世の習はしかな、下さまより妬み怒りて、彼れが罪さへ國主の御覽え遠へとぞ譏りしに、身ゆゑに主人の御名を汚す事、我れまた朋友に疎んぜられしを愧ぢしにか、其年の中程洞家の禪室に入り、晝置こまごまと調へ、自ら切腹して死にし。その弟も此年月彼の太守の前離れず勤め居しに、寵を得ては失はん事を愁ひ、寵を失ふても愁ふと云ふ先言心に染み込み、悲しさ増さるとばかり書き捨て、密かに主君の許を出でて、黄粟山に駆け込み、髪剃りこぼちて何國とも知らず、道心執「修」行と成りしが、無残や數年近所の宮仕に心氣の疲れ果てたる故にや、空しく死れて、早是れも三年の今日に當れりとして、泪襟を濡すに、我さへ哀れを増して聞くに、男も共に愁へ良にて、思ひにて眠り居たるが目を開ひて云ふ、今のあの者の語る如く、世の中萬づの事

を思ひ廻せばはかなく、善悪の境を離れんに如かじと、斯くの如くの身と成り果て、世上の害を免れければ、今思ふに人の上だにもあさましく、有様を見るに、自ら伐る者は功無く、功ある者は隠れ、名ある者は虧くと悟り得て、此濁民の中に凌ぎ、己れを晦まして昔の帛を褐に替へ、何か富貴を樂みに替へたりと笑ふに、此志ざりとは面白く、其夜もすがら語り明しけるに、燈火も限り有りて消えぬ。何をか身に巻く夜の衣も無し、されども主人の身の取置に、暗からず寒からずして、程無く曙に爰を立ち別れつるに、昨日まで見し落葉の薪も絶えて、更に燭立つべき風情も無く、氣さんじなる草の戸を明けて、旅の名残の然らばと云へど、亭主は名残を惜む氣色にもあらず。

③ 渡し船の老人

既に今日は安藝の廣島に出でしに、筑紫中國には云ふも稀なる町並、人の風俗も卑しからねば、此處にぞ暫し足を留めて、所の舊跡または寺社なども拜し廻りて、東の川端に付きつつ行くに、船寄する湊に人呼ぶを聞けば、嚴島への乗場は此處よりと云ふに、さては明神への海路にて有ると、舟長に便を買ひて、彼の島に着きぬ。まことに其佳景靈靈として、並松の群立も小黒く、里の小鹿の聲さへに淋し。神前近う歩み行く程、心も清静と潔きに、漫漫たる夕干潟遙かに有りて、磯柁の普通に遠さかる浪の上を見れば、晏天に舞れたる夕虹の如く耀く廻樓雲に覆いて、冥迷たるに百八の灯笼砌に繞つて、唯だ蒼海を燒くかと思ふ。



瑞籬の内にさし入れれば、金を纏めて、珠玉の彩る寶前を見るに驚き、聞くにまされて、己れを忘れ備儀として徒倚ふに、威靈影の如く響の如く、不思議の神徳眼前に分明たり。頭を廻らせば須彌の頂、嶮嶮と欬ち、松桂に深うして帆荒く、峻嶺修竹茂り合へり。登り見れば磐石堆く、瀑流溪に漲り、老木夫に「脱カ」聳やかす中に雲を帯びたれば、自と鳥の聲踏むかと怪しく、俯して詠むれば釣する小舟の幽かに歸り、里の柴刈り帆風に任す。遊賓酒を携へ、騒客白雲に浜る。その眺望なかなか目を悦ばすに堪へたり。猶濱邊を傳ひ行きて見るに、大師の筆の額、其外古人古賢の詩文、言葉を絶し書くに断えたり。是れよりよりまた神前に詣で心靜かに拜し奉りて、直ちに城下に歸らんとて、岸の上に立ち居しに、向うより爽やかなりし男どもの、心の中に色ありげなる様して來れば、跡よりまた遊女の艶やかなるが數多送り、また逢ふまでの名残を惜み歸るに、淫肆の主人女房まで出でて、彼の男を侍護き載する様に、いとゆゆしげにをかし。我も此舟に打乗れば、船頭嚙を解きて押し出だすに、跡も次第に遠く成り、早浪間一里も漕ぎ過ぐらんと思ふ時、舟長、櫓の手忙しく面白げに歌つて、人の物語さへ聞かず。異様な體なりければ、彼の男も聲を揃へて云ふは、今見るに船人程世に悲しきは無し、晝夜風雨の境を云はず、雷霆寒温にも海上を渡り、死を知らず生を苦む。是れより彼れを見れば、樂事是有らじと思ふに、如何なるにやと笑へば、船頭聞きて、可悲しの足下の心や、從者に侍かれ、美味珍膳に飽き、遊興に長じ、酒に酔ひを進めて、猶色里に戯れ給へど、其餘の日は憂多からん。樂み給ふ所あるも、我と足下と日を云へば一日を替へ、時を云へば一

時を替へたり。今日の樂みは明日の樂みにあらず、先の樂みは今の樂みにあらず、愁ふる所もまた同じ。然か有る時は何をか願ひ何をか悪まん。我が常に樂む所は世を渡るのみ、船入るをも忘れ、出づるをも忘る。此を以つて天を見れば、始まる所を知らず、終る所を知らずと云ふに、皆口を閉ぢて眠りし。

④ 鞆の兄弟

時雨も分けて淋しく、雲霏び木の葉散つて、天籟峰の景を殺ぐに、今日はまた備後の鞆に着きて、此處彼處と見歩りく中、野末の寂然たる寺に至りし。立止まりて見るに、本尊なども物古り、常よりは尊とげなるに、庭には雪に疎き芭蕉の葉、葛葛など四隣を掩ひ、岩に苔蒸し、石碑崩れて、一木の松は己れ育ち「に脱カ」成りぬ。寺の名を問へば、昔平氏の派流小松三位の建てられしよと云ふに、猶更感慨を起して其名ばかりは現に、其人は何時の世の何時の昔かと思ふにさへ、はかなの數添ひ、暫し草鞋を調へて立ち居たるに、杳か方丈を隔てて勤めする醫の響、木魚の聞えければ、如何なる人の世を思ひ取つて、無常迅速に心を付け、己れ本覺の心主を清むるやらんと物ゆかしく、其所を行くに、線香に煤けたる圓窓あり、是れより内を差覗き見るに、年の程五十ばかりの僧の、鬢打被り、爪長なるが、禪單を出でて、誦經するにて有りける。見るも殊勝なりしに、敬を主宰して、片脇に坐すれば、早御經も終りて、また單に入り給ふを三拜して、猶庵中に在るに、今日の日も黄昏告ぐる鳥の聲、行くべき方も思ひ設けねば、此所に暫し足も休め

んと、和尚に詫ひて臥すに、哀猿唄に叫び、梟樹下に音する比しも、生垣の彼方に男女の聲して、ささやか
に物云ふあり。いと訝しく耳を屬けて聴くに、親の許さざりし縁を約して、人目の鬨を恨み、諸思ひする人
の偶相遇ふにて有りけり。其物語いとあさまし。世の憂きさま、過ぎこし昔、後世の契の事まで睦じげ
に泣いつ笑いつする中、此世にてこそ永永契りも重ね、老衰ともに成してんと思ふは由無や、逃れぬ因果の
化名許さぬにこそ、人の物語も我身の上よと、心に愧づれば、外また隠するに便り無し。父母の色合見に
くきさへ、若しや身の上にてかなんど、胸埋れ息苦しく、斯く思ふよりして今日までの憂、其數如何に數
へん。其本問へば皆生と體との有る故ぞかし。いざ此生を替へて他生を契らんよと、念比に語ると思へ
ば、啞と云ふ聲聞えて、其後は物音も無かりし。我れ不審に思ひて、朝の暗きより局を明けて見れば、い
と艶に麗はしき男女の、未だ非ばか「り脱カ」なるが二人、草に枕して臥したり。此由寺守る僧に云へば、
空しき人の知る由の有る方へ人を走らかすに、彼の親しき者集まり來りて悲む有様、更に云ふばかり無し。
とからし、二人を塚に築き籠めし。其れより人沙汰に、毎夜此死人どもの來りて歎き悲むとて、夜に入れば
此邊りに來る人無し。或夜月も詠め過ぐし、星稀なるに、五十餘りの翁、時ならぬ花の優しげなるを折
りて、忽然として來る。何國の人かと問ふに、此寺の檀方、關町の者と答ふ。暫く其様を見るに、寛仁大度
にして常の人にあらず、我れ彼の人に問ふ、此程常寺の裏に妖怪ありとて來る人少なし。然るに何の恐れも
無く此處にぞと云へば、翁「こ脱カ」たへて、我れ聞くに人間の有様、夢見る中は夢を惜み、何ぞ爰に歸ら



ん。覺めての後、あだなるを知るが如し。彼の夫婦夢を覺せり、また生を替へては二人が中の愁解け和すること大方ならず、上に恐るる人も無く、下に憚る人も無く、寒温の境知らねば、衣服の望みも絶え、財寶に「原本にノ字ニツアリ、誤刻トテ省ケリ」心も無し。天上の樂も超え、仁皇の遊にも超えたり。斯かる樂みを捨てて今爰に迷ひ出づる事あらんや。此を知れば、恐ること無しと笑ふ。をかき人かなと心ゆかしく、明の日彼れ「の脱カ」家に尋ね行きて見るに、市中に家業卑しげなる邊りに、物淋しげに住み成したり。内に入りて見れば、家の裏には種種の草花折折の様したるを植ゑて、其脇に机床を飾りて、二人の男酒を飲み水魚の思ひを成して在りし。我れ其邊近く居寄りければ、夕の翁見付けて席に勧めて語る。今一人はと問ふに、我が弟なりと答ふ。是れも其體裕けく、兄に替る人にはあらず。暫し語りて其所を去つて、他の人に此者を聞くに、兄弟常に恨みげなる色無し。兄は浦の業を爲す事に糧をも求め、弟は諸國の船客を請けて世渡りと爲す。然れども一毛も利欲無し。若し客、商賣に利を得て彼れに與へければ、兄弟酒に暮し、或は僧に施に引き、未だ人に一錢の邪を爲さず、餘糧あれば一日も手に置かずして、數奇「傍訓すけトアリ、すきノ誤刻カ」なる草花躑躅やらの物を求めて、是れに心を移し、折節は小松禪寺の廣場にも來て、手づからに植ゑ置き、我れ死して葉末なる露を詠めんと笑ひて、是れを愛し給へり。少し家業の聞を得ては歌書を読み樂み、自身を勞して、人の疲れを拂ふ。また珍らしき男と、不斷事どもまで語るに、深く感じてまた立ち歸り見れば、門口のしるしに升屋とかや表ありし。

⑤ 備前の水汲

是れより船に便して備前の岡山に志し、折節順風、快くて、備中の沖を走せ過ぐれば、石上、名に聞く飛鳥井の姫の扇残して、哀れを留めし所よと聞くに、昔戀しく、友呼ぶ舟人に物の淋しさも増さりて、杳かに行けば、風景都忘るる「と脱カ」詠みし虫明の追門はあれならんと、いと心も忍び難きに、唐琴の泊に舟寄すれば、浪間に音のみ通ふと聞きしも忘れて、奇しき妙なる曲に我國ならぬ異州來て、湘妃の怨曲を聴くかと奇しく、大島の曙晴れて、沙塵の噪く翅に夢を覺しつつ、三里の川口を漕ぎ入れ、或寺に知る由あれば、此所にまた留まりしに、年の程四十餘りの男の、桶に柄杓を添へ、拐に肩を瘦せさし、水荷つて賣り歩りく。如何なる者かと道通る人に問へば、彼れは此三年已前まで總かの宮仕へて有りしに、主人は太守の命に違ひて空しく成り給ひしが、子孫さへに絶えぬれば、身に親しき一門とても跡弔業さへ爲さず、骸骨空しく野逕に捨物、悲しき死。彼れの跡傷はしく思ふに、朝夕斯かる事してのみ飢ゑながら石碑立つべき望み有りしとかや、早く其塚を念比に營みしとも云へり。今汲む水こそ寺に御業すべき便を求むるにや有らんと語り捨てて通るに、其人の心を感じ聞くに尊く、重ねて水汲む人に逢はば心の奥も尋ねんと志して宿に歸るに、其夜は明けて朝疾く件の男また水を荷つて來るを、暫し呼び入れて常の物語などして後、昨日足下の噂を聞くに、亡君の爲めに斯く身を賣し、消善の御業など營み給ふとかや、此事聞くよ

り、其意の難有さ覺えて、今日も見え奉るぞかし。併し我か思ふ所は今少身に安く、體も裕かにて、主君の跡をも弔ひ給まん事もあるべきに、斯くまで實れ疲れたる下職、如何なる心やと問へば、男答へて、然思ひ給ふも理あれど、身悶苦を爲さざれば後を煩はず、後を煩はねば氣を養ふ。氣を養へば心靜かなる初めたり。水を見れば靜かなるの極りなり。靜かなる故に物の影を寫す。人もまた靜かなるは物の鏡たり。傳へ聞く、虚靜恬淡、寂寞無爲は萬物の本なりと。故に水を汲んで靜を鑑み、身を苦めて心の煩ひを遠け、心身全くして、恩を報はんと思ふ所あり。然れども未だ成ると云ふ事を知らず。猶細かしく尋ねんとすれば、國の守に召し有つて賚賜はると私語き、彼の男を連れ行きし後に聞くに、士官と成つて忠節を盡すとかや。

貞享三丙寅歲

孟春良辰

攝陽順慶町心齋橋筋角

書肆

河内屋善兵衛刊

昭和二十一年十一月二十日印刷
昭和二十一年十一月三十日發行

西鶴全集 第二卷
定價 金貳拾五圓

編纂者 正宗敦夫

發行者 日本古典全集刊行會代表者
長 島 卓 二

印刷所 東京都小石川區初音町二〇
森岡印刷製本工場
代表者 森岡憲三郎

發兌 日本古典全集刊行會
東京都神田區西神田二ノ四
電話九段(33)一五九三番

配給元

日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九



982
231

年 月 日

591

關東醫學堂

關
濟

終

